



# スピリチュアルケア 第51号

特定非営利活動法人 臨床パストラル教育研究センター

2011. 4.20

発行人：W. キッペス

発行所：臨床パストラル教育研究センター

〒158-0095 東京都世田谷区瀬田 1-28-2

TEL 03-3700-3425 FAX 03-3700-3427

e-mail: tokyo@pastoralcare.jp

http://pastoralcare.jp

挫折は人生を変える可能

## 福島 → 災禍の島 → 生きる目標：新福島

ウエルデマール・キッペス

わたしたちの社会は「安全第一」「安定」を生きる基盤として強調し、日常生活をしている。だが昨年、宮崎県の口蹄疫と鳥のインフルエンザ<sup>1</sup>に続いて新燃岳の爆発があった。今は東日本大震災である。それらは自然災害と考えられる。それに対して、福島第一原発の爆発による安全の崩壊、不安定な状況は少なくともある程度人間による巨大な災いと言える。それらの悲惨な出来事に「どうして」であろうかとわたしは考え苦しんでいる。だがわたしには正解がない。

石原慎太郎・東京都知事は14日、東日本大震災に関して、「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を1回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思う」と述べた。<sup>2</sup> わたし

は「罰」のようなことはまったく考えなかった。石原知事のことに驚いた。知事ご自身が被害を受けて、それを「罰」として解釈するのは自由だが、他者に対してのこういう判断はふさわしくないと思う。東北地方太平洋沖地震や福島第一原発の爆発によって住まい、仕事場、市町村の壊滅などだけではなく、身内やかかけがえのない両親や友などを突然に失った大勢の人たちに向かって裁くのは好ましくない。わたしには親や祖母を捜している9歳の男の子の姿が特に印象に残っている。



カードには「明日もくるからね 寿仁」と書いた＝宮城県石巻市泉町、朝日新聞3月16日付、西尾写す

私事であるが、わたしは第2次世界大戦で人間による災害を受けた。8人の家族は住まいを失い、避難生活を約3年間体験した。これはわたしたちドイツ人の所為であり、責任としてわたしはその災害を受け取った。だが母は避難した所で「わたしたちはこういう(罰)を受けるはずはなかった」と無事であった一人の人に言われた。そのときショックを受けた母の様子は今でも印

災への国民の対応について感想を問われて答えた。

[http://kaminogesampo.at.webry.info/201103/article\\_234.html](http://kaminogesampo.at.webry.info/201103/article_234.html)

<sup>1</sup> 口蹄疫被害: 殺処分された牛豚29万頭、補助金総額 528億円、被害農家の数 1,379戸(2010年12月15日 読売新聞)

鳥インフルエンザ被害: 殺処分数 94万羽、被害農場の数 11ヶ所(2011年2月8日 MSN 産経ニュース)

<sup>2</sup> 一つのレスポンス。石原氏は「天罰」発言の前段として「去年1番ショックだったのは、おじいさんが30年前に死んだのを隠して年金詐取する、こんな国民は世界中に日本人しかいない」と述べていた。

(朝日新聞2011年3月15日 社会22面 都内で報道陣に、大震

象に残っている。発言者にとってわたしの家族は悪い人間であったから天罰を受けたのは当然なのであった。ちなみに発言者はわたしたちと同じキリスト教徒であった。

災害や不幸に関して自分なりに深く正直に熟考することは大切である。必要に応じてそれを他者に提供し、議論し合う事も有意義などがある。だが自分の解釈はあくまでも仮説であり、全ての人や状況に当てはまる教義ではないことを意識するとよい。個人的な一般論は他者の心を傷つけてしまうことも例外ではないからである。

安全や安定のない状況の中に強制的に置かれている人たちにとって生きること、生き続けるための力は多様であろう。基本的に要求される要素は希望、および今の状況の中でできることを把握し、それに集中することではないだろうか。心配や不安を持つことは当然である。だが、既に制限されている内面的な能力を余計な心配事のために使うことは逆効果を招く恐れがある。

災いという、いわば試練に関しては「なぜ」よりも「何のために」について考えるとよい。「なぜ＝原因」は変えられない過去にあり、「何のために」という問いかけは将来を指す、いわば開かれたプラスの面を与えることも少なくない。上述した私事だが、爆弾によって家の中にあつた自分のものを失った(奪われた)が、残っていたのは故障した自転車で、家から離れた倉庫に置いてあつた。この自転車はわたしの唯一の“財産”であつた。ところがその自転車もある日盗まれ、雪まじりの雨が降る中、避難所までの18kmほどの距離を歩くことになった。そのとき思わず一つの賛美歌が胸の中から湧いてきた。その内容は「人間よ、世俗から離れ」で、わたしのその後の人生の舵になった。現在、日本にいるのはそのとき生じた一つの結果である。

他者の不幸から目をそらすことは適切ではな



い。同時に不幸ばかりじっとみるのも健全ではない。今回の被害をわたしはまったく受けていないが、地震の被害から生じた教訓について考えている。

・ まず、存在したり持っていたりすることが当たり前かと思っていたことが実は当たり前でないことを新たに意識している。

住まい、洋服、飲食料、電気、仕事ための道具、電話、携帯、それに忘れがちである命と健康や同僚。

- ・ 「なぜ自分ではないのか」を再認識すること。自分は災害を受けた人となぜ違っているのであろうか。
- ・ 今のできごとから学び、災害への知識を得ようとする事。
- ・ 内面性への集中。(例:好奇心からニュースを聞いたり見たりするのではなく、自分の心・魂、自分の内面性(スピリット)を育成するために利用すること。)
- ・ わけのわからないこと、変えられないことを話題にしないこと。
- ・ 無理矢理に苦しそうな顔をしないこと。
- ・ 連帯感。災害に遭っている人々に対して関心を持ち、自分ができることを工夫すること。それによって昨年から言われている「無縁社会」や「孤族の国」からの一つの解放が生じてくる。以前被害を受けた町(例:神戸)や国(例:インドネシア)からの恩返し募金活動や援助隊(例:ニュージーランド)のこと。
- ・ 原材料を大切にし、それを節約すること。(例:便利さではなく可能である限り自動車より自転車でいくこともできることのひとつである。)
- ・ 混乱状況の中での電話などの通信は被災している人たちの状況を考え、単なる友人関係であれば省くことなど。
- ・ 祈ること。「命の源」との関係を強めること。(「学び」参照 12 頁) 今回の大災害では被災した人からもしなかった人からも「祈ってください」と何度も頼まれたこと、そして海外からの祈りへのリクエストも印象的だった。

# 悲しむ力と育む力：スピリチュアルケアの奥行き

## 東日本大震災によせて

井上 ウィマラ\*

この原稿を書こうとしていた3月11日、東日本大震災が発生した。16日現在、地震や津波の被害に加えて原子力発電所の事故がどのようになるかによって、日本の今後が大きく左右される大きな危機の渦中にある。こうした状況下でスピリチュアルケアについて語ろうとする私の心中にある痛みと希望について書くことから始めさせていただきたい。

この日本の地に生きてきた人びとは幾度となく今回のような大きな災害で仲間を失いながらもいのちをつなげてきた。そうした悲しみや不安や絶望を生き延びるためのいのちの智慧の一部は伝統的な祭りや冠婚葬祭をはじめとするさまざまな儀式や儀礼の中に埋め込まれているはずだ。そうした先人の智慧と勇気と思いやりの種を掘り起こし、今この時点における私たちの体験の中に蒔きなおしてゆくことが必要となろう。科学や宗教、政治や経済、あらゆる既成の枠を超えて、この辛すぎる体験を生きぬいて新しい日本を創造してゆくためのつながりやネットワークを再構築する機会に変容させてゆこう。今こそ、この日本の自然を愛しながら喜びと悲しみの波を乗り越えていのちをつなげてきてくれた先人たちの思いにつながりなおし、私たちのことを思ってください海外の方々の気持ちにも支えられ、地球という星の日本を意識して生きる道を探し出したい。

### スピリチュアルケアの歴史的背景

スピリチュアルケアの背景としての現代的ホスピス運動は、シシリー・ソンドースが1967年にイギリスでセント・クリストファーズ・ホスピスを創設したことに始まった。看護師、医療ソーシャルワーカー、医師としての経歴を持つ彼女は、①モルヒネによる効率的な疼痛緩和、②患者の生活の質を高めるための全人的ケアとそれを可能にするチームアプローチ、③患者の個別的ニーズに合わせたケアを提供するための臨床的研究とその成果を伝えてスタッフを教育してゆく場という3つの柱に基づいてホスピスを構想した。

ホスピス運動は、ケアやコミュニケーションの原理であって建物に依存するものではない。シシリーは、「ホスピス運動の理念はホスピスという名のもとにおいてのみ実現可能なものではなく、一般医療の中にその思想の芽が根付くことが重要なのだ」という信念を抱いていた。

### 日本のスピリチュアルケアが抱える課題

西洋のスピリチュアルケアでは、チャプレンなどの専門的トレーニングを受けたスピリチュアルケアワーカーが正式な医療チームの一員としてホスピスや病院で働くシステムとなっていることが多い。これに対して、日本では医師や看護師などが主になってスピリチュアルケアも担っていこうとする傾向が大きい。チーム医療が言われるようになっていっても、専門職としてのスピリチ

ュアルケアワーカーが関わっている緩和ケア病棟はいまだに少ない。スピリチュアルケアの医療化と呼べる現象であろう。

こうした中で患者のスピリチュアルペインが吟味され、患者へのケアが研究されているのだが、医師や看護師の側のスピリチュアルペインについて研究の光が当てられる事はほとんどない。過酷な勤務条件の中で働く医師や看護師にとって、自らの感情の問題に向かい合うことを求めるのは厳しい注文なのかもしれない。しかし、そうした自らの存在の深みに向かい合うことなくしてはスピリチュアルペインの何たるかはわからないし、スピリチュアルケアを実践してゆくことは難しい。スピリチュアルケアワーカーを養成する過程においては、自身のスピリチュアルペインを知り、それを抱きかかえることを学んでゆくことが不可欠となる。

解決したり治療したりすることではなく、寄り添い見守る器となることを身につけることがスピリチュアルケアの本質ではないかと思う。何かをすること (doing) からそこに在ること (being) へのモードの転換と言われる所以だ。そのようにして自らの存在を見守りの器として提供できメタスキルが身につけていけば、身体的ケア、社会的ケア、心理的ケア、どんなケアをしていたとしても自然にスピリチュアルなケアを展開することが可能になる。

### スピリチュアルケアと社会構造の変化

スピリチュアルケアの重要性が認められるようになってきた時代背景には、出産や看取りが地域共同体に支えられてそれぞれの家でおこなわれていた時代から病院という施設で管理される時代への移り変わりがあった。人を結びつける地縁血縁の力が弱まり、家族形態も大家族から核家族さらには複合家族へと激変しつつある。

こうした社会構造の変化の中で人はアトム化されて絆は薄れてゆく。野生のチンパンジーが群れから離れて動物園で飼育されると、出産や子育てに問題が頻出して飼育員の介入が必要になるという。それと似たような現象が人間社会にも生じている。我々は産み育てる力や看取る力を失いつつあるのだ。M.バリントが「基底欠損」という言葉で表現した自我の脆弱性は、産業革命によって進行した社会構造の変化に伴う人間的基盤を養う力の低下を言い当てたものであった。現在ではさらに、携帯電話やゲームの普及などによってそうした存在の希薄化にさらなる拍車がかかっている。

誕生や死が地域の中の自宅で見守られていた時代には、シャーマンや牧師や僧侶、ときには産婆などが、個人の力ではどうにもならない生老病死の問題を見守り、避けることのできない悲しみを抱きかかえるための環境を提供してきた。そうした社会的支援に支えられて我々は苦しみの中に人生の意味を見出し、希望を見出し、思いやりを育んできたのではないかと思う。

ところが、誕生や死を病院という施設で集中的に管理するようになった現代社会は、そのようにいのちを見守る役割を医療共同体の中に作り出すことを忘れていた。ここに、スピリチュアルケアが注目されるようになってきた裏の意味があるのではないかと思う。

### スピリチュアルケアの新たな次元

母子関係に関する多くの貴重な洞察を残した D. W. ウィニコットは育児の重要性に関連して「魂が身体に住み込む過程」という表現をした。子育てが子どもの魂が身体に住み込むための支援活動であるとすれば、死の看取りは、その魂が身体から旅立つための支援活動ということになる。

ほかの動物に比べてきわめて未熟な状態で生まれてくる哺乳類の人間にとって、人生の最初期は母親的養育者への絶対的な依存状態から始まる。子育ては、こうした絶対的な依存状態から相対的依存、そして自立にいたる過程におけるケア活動である。こうしたケアによってのみ人間は成長し、言語を獲得し、「私」という観念を養い、社会生活が送れるようになる。

これに対して死に至る過程では、人は自律を失い、他者の世話になるようになり、「私」という観念を手放しながら究極的にはいのちを自然に委ねることへの支援を受ける。残された人々が大切な人を失った悲しみを味わいきってゆく過程では、喪失した対象が持っていた自分にとっての意味を見出し、悲しみのエネルギーを思いやりに変えてゆくための支援が必要となる。ゆりかごから墓場まで、人間はケアなしには生きてゆけない動物なのである。

医療化される傾向にある日本のスピリチュアルケアが医療の抱える壁を打ち破って広がりや深みを育ててゆくためには、人間存在に欠かせないケアの本質について再考し、あらゆるケアに通底する息遣いとしてのスピリチュアルケアを構築しなければならない。

こうした新たな視点を拓いてくれるものは、悲しむことに関する心理学的理解であろう。対象喪失に関する研究に先鞭をつ

けたのは、フロイトの「悲哀とメランコリー」であった。そこでフロイトは、通常の悲しみと病的抑うつとの分岐点を自我感情の低下に求めた。自分自身を大切にすることができないと、悲しんでも失ったものの意味を見出すことができず、悲しむほどに内向した攻撃性が自分自身を貧しくしてしまうという見解だ。

スピリチュアルケアの現場で出会う悲しみの背後には、それまで本人も気づかなかった、あるいは気づかぬふりをして押し込めてきた悲しみが隠れていることがある。そうした幾重にも重なった悲しみのすべてを言語化してゆく必要はないが、それらの悲しみが十分に涙を流すための環境は必要になるだろう。その環境は人によって提供されることもあるし、時によると自然とのふれあいや、超越的な次元に触れる体験に支えられることもある。

スピリチュアルケアは、身振りや息遣いのような非言語的なレベルでクライアントに寄り添いながらクライアントがやりのこした魂の仕事をする環境を提供したり、それを静かに見守っているだけの作業に始終したりすることもある。自分を大切にしながら悲しむ力を得たとき、私たちは自然に新しい命を育む力を得るのである。



\* 井上ウィマラ：1959年山梨県生まれ。京都大学哲学科宗教哲学専攻を中退後、曹洞宗の只管打坐を学んだ後、ビルマのテーラワダ仏教でヴィパッサナー瞑想とパーリ経典について研究。カナダ、イギリス、アメリカで瞑想指導の傍らで心理療法を学ぶ。マサチューセッツ大学医学部のマインドフルネス瞑想に基づいたストレス緩和法のインターンシップを特待生として終了。現在は高野山大学准教授で仏教瞑想に基づいたスピリチュアルケアの基礎理論と実践的援助法について構築中。



## 『スマイル』(チャーリー・チャップリン)

駒田 久美子

3月11日の東日本大震災後から、私は大きな悲しみや苦しみのなかにいます。東北や関東で被災された方々はもちろんですが、あまりに悲惨な被害状況に、日本中の多くの人々が心を痛めていると思います。自然の巨大な力のなかでは、人間の営みなど本当に小さなものに過ぎないのだと、絶望的な無力感すら覚えます。

しかし、悲しいニュースのなかにも、しばしば、被災者が復興に向けて活動している姿を目にします。そんな姿を見たり聞いたりしていたら、私はある歌を思い出しました。チャップリンの「モダンタイムス」のエンディングに流れる、「スマイル」という歌です。



Smile, though your heart is aching  
(スマイル たとえ胸が痛くても)

Smile, even though it's breaking  
(スマイル たとえ張り裂けそうでも)

When there are clouds in the sky  
(空に雲が立ち込めていても)  
You'll get by... (乗り越えていける)

If you smile (微笑めば)  
Through your fear and sorrow  
(恐くても 悲しくても)  
Smile and maybe tomorrow

(微笑みさえすれば きっと明日は)  
You'll see the sun come shining  
through for you

(太陽が あなたに降り注ぐだろう)

Light up your face with gladness  
(喜びで顔を輝かせて)

Hide every trace of sadness  
(あらゆる悲しみの跡を隠して)

Although a tear may be ever so near  
(たとえ 涙があふれだしそうでも)

That's the time you must keep on  
trying (その時こそ 微笑むとき)

Smile, what's the use of crying  
(泣いていても仕方ない)

You'll find that life is still worthwhile  
(それでも人生には 十分に生きる価値があるのだと)

If you'll just smile  
(気づくだろう ただ微笑むだけで...)

太古の昔から、日本は多くの天災に見舞われてきたと思います。私たちの祖先は、人間の力ではどうにもならない自然災害を、笑顔や祈りで乗り越えてきたのではないのでしょうか。今この辛い時期にこそ、笑顔や祈りが必要だと私は信じます。

日々、辛いニュースを見たり聞いたりして気分が落ち込んでしまったとき、ぜひ「スマイル」を聞いてみてください。

## 目標に向かって

臨床パストラルケア・ワーカー 高橋 昌子

私は、NPOスピリチュアルケア東京のワーカーとして現在活動しています。在宅医師から、老々介護をしていらっしゃるお宅へ行ってマッサージと話しを訊いてほしいとの依頼を受け、一年半まえから訪問しています。

奥様は10年間次々と病気をなされ、現在では大動脈瘤で血圧が上がると命にかかわるということで、ご主人様が血圧の管理をなさるなど、とても神経を使って介護していらっしゃいます。現在は寝たきりの状態で、全てご主人の手が必要です。

最初に訪問した時、ご主人が、『疲れたよ、時々お前も殺して、おれも死ぬ、いいか?』って言うと、『いいよ』ってね。そんな会話をするんですよ。」と話をされたのには驚きましたが、本当に老々介護の厳しさを感じました。それ以来、毎週一回訪問しています。奥様にマッサージ(静かで優しいやり方で病人やご高齢の方に適している、足の親指の先から頭までを行います)を一時間かけて行ったあと、3人で向き合い、主に、ご主人のお話を伺います。

マッサージの間、奥様と会話をすることで、笑い声がベッドのある部屋に広まります。その後の時間、お二人の出会いから、今迄歩いた人生を、又10年間の病歴等、お二人で確認しながら話して下さいます。ご主人は「今までは何時も話は一方通行。会話は無いね。でも高橋さんが来てくれると、こうして会話できるんです。嬉しいねー。それにO子の笑い声が聴けるんです、本当にありがたいで

す。」と話して下さいます。介護の大変さを訊いてほしい、解ってほしいという思いを、ご主人様に寄り添い尊敬の気持ちで聴かせていただいております。

閉塞感から開放されたのか、食事が、今迄うどんを一本やっとなべていたのに、今では一日3回夕食にはうなぎを食べるようになりました。いきめなくて気を使っていた便の状態までもよくなったので、ご主人は不思議そうに私の手の動きを見えています。そして嬉しそうに「OO子、よかったなー、気持ちいいかー?」と言って奥様の頬をなでるのです。

最近、私自身骨折して一ヶ月半訪問出来なくなりお休みしました。再会する2日前に「明後日、伺います」と連絡すると、高かった血圧が急に下がったそうで、再会した当日は「本当にありがたい」と、胸をつまらせ涙するご主人でした。お二人は83歳、在宅介護の厳しさを本当に感じます。

20年前、私は病人に優しいやり方のマッサージはないかしら?と思い、当時勤めていた職場の方に相談したら「自分がしているやり方がそうよ。」というので、早速、習い資格を取得しました。近所で困っていらっしゃる方や舅や家族にしてやっていました。その間様々な方との出会いがありました。

10年前には「日本におけるミッション」というテーマのカトリック信徒養成講座を受けました。その時の衝撃的な出来事は忘れることは出来ません。講座の最後に講師の方

が「最終的ミッションはスピリチュアルケアです。」と、その言葉を残し去って行かれました。キリストを信じるものとして、私は、その『スピリチュアルケア』というものをしなければ！という使命感が内で燃えるのを感じました。当時、引き受けていた民生委員をすぐに辞め、スピリチュアルケアの学びに入りました、自分でもよく修得出来たと思います、あの衝撃的な出来事をとうして強い使命感が私を引っ張って認定まで辿り着かせてくれたのだと思います。キッペス先生の講座の中で「病院で、人とすれ違って、目と目があつた瞬間、その時でもスピリチュアルケアは出来ます。」と、仰った言葉を忘れることが出来ません、私はそうありたいと思いま

した。存在そのものが問われます。スピリチュアルな存在であることが、わたしの人生の目標です。

スピリチュアルケアの学びが終わった後、学ぶ以前にマッサージを通しての様々な出会いや人との関わりを思い返した時、あー、あの時あの方はスピリチュアルな叫びをしていらした、舅に私はスピリチュアルケアをしていたなー、あの時もう少し寄り添って私が結論出さなければよかった等とか、様々と思ひ出します。

残された人生目標に向かって歩きます。そして、スピリチュアルケアのプレゼントとして、希望なさる方に、マッサージは色んなかたちで続けたいと思います。

## 新 会 員 名 簿

敬称略

### A 会 員

この度、A 会員（団体会員）として入会されました塩野義製薬株式会社様をご紹介します。塩野義製薬様は長い歴史を持つ日本の代表的製薬企業ですから皆様ご存じだと思いますが、長年に亘り「疼痛」をより良くコントロールする薬を世の中に出してこられました。最近では、「がん性疼痛緩和推進コンソーシャム」のリーダーとして産官学協働のプロジェクトを推進されており、また厚生労働省が日本緩和医療学会に委託した緩和ケア啓発事業「オレンジバルーン プロジェクト」を応援されています。

そのような訳で、緩和ケアの中で身体的疼痛と並んで重要な「スピリチュアルな痛み」のコントロールに深い関心を寄せられ、当センターの会員になりました。

塩野義製薬株式会社 URL <http://www.shionogi.co.jp/>

### B 会 員

津田 敬子            伊藤 信子            加来 美代子            芝山 陽子

### 寄 付 者

安元 眞理枝(3)    行徳 清美(3)    石田 房子(1)    三橋 理江子(3)    山下 春憲(3)  
市原 光子(1)    大島 とし江(12)    研修参加者(4.1)    雙葉学園同窓会    聖ドミニコ宣教修道  
研修参加者(1)    市原 光子(1)    チャリティー係(50)    女会(30)

※ 2011 年 4 月 11 日現在 12 名



# スピリチュアルケアの的確な援助者の教室

## 第20回

### 訪問記録の実例

会話記録(G:ゲスト、H:ホスト)



このゲスト（80歳代女性）への初めての訪問。訪問時間、約40分間。

「語らぬ口、語る瞳」

H1: こんにちは。私は〇〇と申します。今日はこちらの病院で研修をしております。しばらくこちらで一緒にさせていただきます。しばらくこちらで一緒にさせていただきます。

G1: (…沈黙  
右の鼻の穴にチューブが入っており、かすかにまばたくことができたり、うすく目を開けたり、しかし口を少し開けた状態であえぐような息づかいをされ、左手にはミット様の手袋がはめてある。呼吸のくるしそうな音がきこえている。10分ぐらいして左手をそっとさわってあげると、目を心持ち大きく開く)

H2: 〇〇さん見えますか。私、しばらくここにいさせてもらいますね。〇〇さんとうしていられるとうれしいです。

G2: (…沈黙 10分。呼吸のあえぐ音がきこえる時、まぶたが動き、左手を動かされる。その手をさする。)

H3: 〇〇さん、ここにいますよ。苦しそうですね。

G3: (…沈黙 10分。  
目を開けて見つめ会う 10秒くらい。  
呼吸の苦しそうな息づかい)

H4: 苦しそうですね。何か話したいこと、叫びたいこと、悲しいこと、伝えたいことがありますか。大丈夫ですよ、きっと〇〇さんの声は聞いて下さっていますよ。(ときどき、左手を動かされる、息づかいがきこえる。)

H5: 今日とは〇〇さんとうして一緒にいさせてもらってうれしいでした。ありがとうございます。

G5: (…沈黙 5分。少し目を開けられる。)

H6: さようなら。(退出して時計を見ると40分もいたのに自分でも驚く。そんなに長くいたとは思えなかったし、不安もなく静かに時間が過ぎていったように思われた。)

## ▼訪問記録に対する▼

## ～～木澤 先生からのコメント ～～

**G1:**「左手をそっとさわってあげると」とあるが、ホストの思いでなく、「触ってもいいですか」と G を尊敬して伺ってからのほうがよい。最初は「G は聞こえているし、意識がある方」という前提のもとで接したらどうでしょうか。

**H2:** 「見えますか」と尋ねたのは良かった。同時にその反応をしっかり見て、他の方法、例えば「聞こえますか」とか「返事ができますか」などその後も試みて G さんの現状を把握し、認識しようと努力してもよかった。すぐに、G1 と同様「私、しばらくここにいさせてもらいますね。〇〇さんとこうしていられるとうれしいです。」と H の思いが優先してしまった。G さんがそれを喜んでいるかどうかは確かめようともせずに。

**G2:** 眼が動き、左手が動くことに意思伝達があるかどうかを確かめてもよかった。また「手をさすってもらうのは G が望んでいることだ」との確認もせずに、手をさすってあげることは良いことだと思いきまないとはいえませんが、G 中心の訪問になりやすい。G を尊重し、思いを知ろうと努力することは G を大切にし、尊敬することにつながる。

**H3:** H が「ここにいますよ」と伝えることは H にとって快いことかもしれないが G にとってはどんな意味があるか、また、たとえ G が認識できるにしてもできないにしても G に「苦しいですね」と伝える

ことが G にとってどんな支えになるか H の中で明確にしてもよかった。

「苦しいときは心の中で誰により頼んでいますか」「その方と一緒に寄り頼んでみましょうか」「苦しみの向こうに何か希望が見えますか」等々問いかけて、反応を期待して待つのもよい方法と思う。反応はできなくても刺激になることを期待して。

**H4:** 「何か話したいこと、叫びたいこと、悲しいこと、伝えたいことがありますか。」と確かめたのは良かった。がすぐ「大丈夫ですよ、きっと〇〇さんの声は聞いて下さっていますよ。」と断言するのは H の思い込みのように感じられる。

**H5:** 40分いさせていただいたの感謝とともに、今、ここで、命を頂いて、それを懸命に生きる G さんに対するエールや祝福のような思いを伝えるかどうかわからなくても、伝えることを願いながら表現できたら、よかったと思う。

G の意思を超えて生かされている G の命を G が受け入れ、愛で、感謝することができることを願いながら、後押しをし、また、G が H を喜ばせてくださった、事実を伝えて、G の命が意味あるものであることをともに味わうことができる訪問でありますように。



## ～～ 國枝 先生からのコメント ～～

終末期の患者さんには、昏睡状態、傾眠状態の方が多くいます。こうなると医療者はナースコールもなくなり、医療者は定期的な看護行為や医療行為のみの訪問となります。こうした時こそスピリチュアルケアワーカーの働きが大切になります。

ところが難しいのは、言葉のやり取りができないということです。それができないので逃げたくなってしまうのではないのでしょうか。しかしこうした場合こそ、あなたが通常「患者さんと一緒させていただくため」と訪問記録に書くことが本物かどうか問われるのです。

「一緒させていただくため」は、その方に寄り添うということであり、その方と共に居るということです。あなたが「居る」、「存在する」ということがとても大切なことです。「存在する」(Being) ことは、肉体的に存在するということだけではありません。精神がそこに存在することです。精神がそこに存在するためには、五感は清明でありながら、思考を働かせないということです。他の表現をすると、ポケットした感じでありながら、現在進行していることにはっきりとした感覚を持っている状態とでも言えましょうか。慣れない私たちは往々にして、何を呼びかけようか、反応のない患者さんにどう関わったらいいか、どのように切り上げたらいいのか等々、思考の虜になってしまいます。こうなってしまうと自分の考えに直面していても、相手に寄り添ってはいないことになります。

五感は清明でありながら、思考を働かせないということは、G1のカッコの中のことです。「右の鼻の穴にチューブが入っており、かすかにまばたくことができたり、うすく目を開けたり、しかし口を少し開けた状態であえぐような息づかいをされ、左手にはミット様の手袋がはめてある。かすかにまばたくことができたり、うすく目を

開けたり、しかし口を少し開けた状態であえぐような息づかいをされ、左手にはミット様の手袋がはめてある。」は視覚をよく働かせています。視覚をよく働かせることで、患者さんへ意識が向き、患者さんの小さな変化にも気づき「ともに居る」状態が起こります。

H2の「私、しばらくここにいさせてもらいますね。」はHの患者さんを尊重する態度です。そしてHは自分の「うれしい」という感情を伝えています。それはこの時点でのHの偽りのない表現でしょう。それは本物です。

相手に集中していると時間が経つのが早いものです。そこでは時計の時間ではなく、こころの時間が働いているのです。その時は共に居られたのです。時間を長く感じているときは意識が自分に向いている時です。そして「今、ここ」に居なかった証拠です。H6で（退出して時計を見ると40分もいたのに自分でも驚く。そんなに長くいたとは思えなかったし、不安もなく静かに時間が過ぎていったように思われた。）とありますが、不安もなく静かに居られたことは、共に居られたことを示しています。

このような患者さんに接した時、五感を十分働かせながら、患者さんの呼吸に自分の呼吸を合わせてみることをお勧めします。呼吸を合わせることで自分が共に居ることになりますし、そうすると相手と通じやすくなります。その上、Hの方にさまざまなこと、即ち、話したい言葉が出てきたり、歌を歌いたくなったり、お祈りがしたくなったり、相手に触れてみたい等、が起こります。そうした願望が起こってきたらそれに従ってみたらよいと思います。



# 学び

## スピリチュアルケアの勉強室 10

### PRAY FOR JAPAN 祈ること

ウアルデマール・キッペス

3月11日の東日本大震災と東京電力福島第一原発の事故の後、「祈り」ということばを今までよりも盛んに目にし、耳にするようになった。(3月26日のグーグルによれば、新聞記事やマスコミの報道の中で「祈り」という言葉が214万回出て来たという)。もし「祈ってください」とか「祈るしかない」と誰かに言われたとき、臨床パストラルケア・ワーカーはどういう態度を取るだろうか。「祈るしかない」という言葉には、「盲目の運命(論)」、謂わば問題をそれで完結させる恐れがある。いずれにせよ、それは「祈り」の理解を求められる事柄なのである。

「祈」の字形:「祈」という字は、意味を表す「示」(神の意)と、音を表す「斤(きん)」とからなる形声字。(「字源辞典」角川書店、p413、1976)

祈ることの根本的要素は4つある。即ち、

- ・命を含む自然界そのものは五感で確認できない「超自然(者)」に因るものであること
- ・この「超自然(者)」は人間を含む自然界に影響を及ぼす存在であること
- ・生き物には不滅な部分があること
- ・人間が「超自然(者)」との関係をもつことを認め信じることである。ちなみに唯物論者には祈る行為としての基盤がない。

人間にとって祈ることは、基本的に「超自然(者)」との関係をもつことを意味する。この関係は人間関係と同様に、相互の協力によって啓発し育成していく要素である。祈ることはその関係を固定させる行為でもある。その行為の基礎は尊敬と信頼であり、感謝と賛美、願いと謝ること(ざんげ)などを行う。

「祈り」はことばや儀式ではなく関係を表すため、わたしは「祈り」よりも「祈る」という表現を優先して使う。関係さえあれば祈ることにことばが

あっても無くてもよいのである。「超自然(者)」への尊敬があれば沈黙や歌、ことば、ジェスチャー、喜び、なみだ、踊り、ひれ伏すことなどは祈ること、祈りになるのである。

祈ることが本物になるためには自分の祈る理由、祈る対象、祈る目的、祈る習慣(時間、場所、姿勢、頻度)を明確にすればよい。

患者訪問の際、わたしは少なくとも心の中で祈っている。訪室のとき「この部屋に平安がありますように」と祈り、患者との関係の度合いに応じて「祈ってよろしいですか」と尋ねてみることもある。患者が「はい」と答えれば、わたしは「心を合わせたいので、何のために祈って欲しいでしょうか」とさらに尋ねる。それを確認してから患者と共に自分のことばで祈る。ちなみに、しばしば賛美歌を歌う。そのときでも自然にできるなら患者の名前や患者に関係のあることばを入れる習慣がある。

ドイツでは、患者が看護師に「祈ってください」と頼めば、それに答える義務がある。看護師がもし唯物論者や無神論者であれば、祈ることのできる同僚を呼ばなければならない義務があるという。

祈ることは基本的に「命の源」との関係が強めることであり、生きる力の泉にもなる。今年の霧島の新燃岳での爆発で、家が灰でいっぱいになった知り合いのことが印象に残っている。一人で暮らしている本人は、朝食を食べているときに新燃岳の最初の爆発を目撃した。「(わたしは)パニックにならず部屋を一つずつ整理しています。今、一番力になるのは静かな祈りです」という電話の発言は強いインパクトとして記憶に刻まれている。

# 3日・5日間 研修会感想

## 横須賀 聖ヨゼフ病院

2011年2月7日～11日

### <科目Ⅲ>:スピリットとスピリチュアル

研修Ⅰ・Ⅱを経て今回Ⅲを受講し、初めて患者訪問も体験しました。

自分を知り、ゲストを病者としてではなく、1人の人間として受け止めるというスピリチュアルな面を体感。

ゲストとの関わりの中で、1人1人の命の重さを改めて感じ、内面にあるものに向きあった時、ホストである私という人間のあり様が問われることを痛感し、立ちすくんでしまいそうになりました。穏やかな沈黙にいる事の難しさ……。

両者の価値観、人格、死生観等が瞬間の言動に反映される。ホストがそれをどのよ

うに受けとめ、スピリチュアルな痛みを解放に持っていけるのか。ひいてはゲストの人格を高める関わりを考えると途方もなく高いハードルに挑戦していると思いました。しかし、身も心も右往左往しながら、何かしら自分の中に入ってくる感触がありました。講師の講義の言わんとする事が訪問や検討会を通して、確実に理解出来たように思います。かけがえのない命が輝きを増すケアが出来るように学んでいきたいと思ひます。

(I. Y.)



## 東京 聖母病院

2011年2月13日～17日

### <科目Ⅷ>:心理学的・哲学的・神学的/宗教的人格の統合

2年前の冬、パストラルケアという言葉  
を初めて耳にしました。その後、何かに引き寄せられるような、背中を押されるような感じで、その年の春、科目Ⅰの研修に参加しました。11名の参加者は年齢も職業もさまざま、それぞれの人生のある時期にそれぞれの思いを抱え、その場に共に在るこ



とをととても不思議に思いました。また、私にとって接点の無かったキリスト教という信仰、神父やシスターの存在も不思議で、自分がこれから見知らぬ人たちと未知であるパストラルケアを共に学んでいくことに少しの緊張を覚えました。そんな中、初めて参加したミサにますます戸惑い、

「この先大丈夫かな・・・」と不安になっていると、「ミサそのものよりも、あなたが心に感じたことを大切に」と神父様が言葉をかけて下さいました。型にはめるのは苦手でも、心に感じたことを大切にするのは得意でした。

感じたまま、ありのままの私でその場に在れば良いと思うと少しずつ気が楽になりました。

自分自身、他者、自然と健全な関係を持つことの大切さ素晴らしさを学ぶことからスタートして、その後、内面的な関わりのために必要なことを丁寧かつ熱意を持って教えて頂きました。いま、8回の研修を終え、これまでの研修を一つひとつ振り返っています。

ゲストとの貴い出会い、その時流れた時間は私にとって忘れられないものとなりました。講師の先生、スーパーバイザー、コーディネーターの方、研修病院の方、毎回思いを分かち合い、支え励ましあいながら共に歩んできた研修生の方々、一度の貴い出会いとなった方、研修では会えなくてもお互いの思いを分かち合い続けている方など・・・、すべての出会いにいま心から感謝しています。

そして、最後の研修で思いがけなくプレゼントを頂きました。それは、生まれたばかりの“命”との出会いです。今回の研修

で産科を訪問する機会を頂き、何度かゲストとホストが赤ちゃんを囲む、あたたかで神聖な空間を体験させてもらいました。命に備わる圧倒的なプラスのエネルギーは、ただそこに存在しているだけで人を癒し、力づけます。講義の中で何度も言われた、Do i n gではなくBe i n gの体現がそこにありました。パストラルケア・ワーカーとしての使命をしっかりと自覚した上で、はだかの自分を差し出せる勇気と信頼をもつことが出来れば・・・学び、出会いを与えてくださった神さまに応えることになると思います。

過去7回の研修会の間は全くと言うほど“使命感”が無く、こんな状態で続けられるのだろうか・・・と思いながら、何とか進んできました。しかし、不思議と8回の研修が終わった途端に、ジワ～と使命感らしきものが出てきました。“使命感”とは、持とうと思って持てるものではなく、やはり与えられるものなのだというを実感しています。2年前には聞いたことも無かった「パストラルケア」が、縁あって私のライフワークになろうとしています。まだまだ未熟ではありますが、これから一つひとつ経験を重ね、パストラルケアに長く関わり続けたいです。(I. M.)

## 鹿児島 ザビエル教会

2011年3月19日～21日

### <科目Ⅱ>: 価値観の明確化

大震災から一週間、悲惨な現実を祈りながらの研修会でした。静かな一時の後、講師の先生から「今朝の新聞の中から、一番心に響いた言葉を書いてください」



と言われ驚きました。

～人は一人では生きられない。かけがえのない命～  
今も響いています。

講義に入り、多様な価値観の中から自分の価値観を捜

し出すこと、明確にすることの大切さ、さらに生きることによる人格の形成等真剣に学びました。学びの途上で予習課題の価値観の中に、手段が入っていることに気づき、これまでの学びの不十分さを認めながら改めて違いを意識しなおしました。2人のかたから書いていただいた価値観もあわせ、数多いものから選び、眺めた時、私が重要として選んだものが半分、4つは加えられたもので、その中の1つは全く思いもよらない「相手」という価値観でした。驚きました。すぐそば



研修後、食事の時のハプニング

に“私の中に存在していながら意識にのぼらず、心深く沈んでいたのか、言葉のちがいであったのか、不思議な出会いでした。分ち合いの中でとても重要な価値観だと気づき、気づかされ、いただいたことに感動し、宝物のようにうれしく感謝しまし

た。講師の先生からも助言をいただき、トップの信頼の横に位置づけることによって一層、明確になり、落ち着きました。自分の相手は自分自身であり、内なる声、内なる方であり、日々かわる「相手」であり、相手と信頼の内に生きること…とても新鮮に感じました。

又、このことが研修会初日の新聞記事とも結びついたことも不思議でした。これからは意識しながら明確化された価値観を生きたいと思っています。同時に相手の価値観を知ることの

大切さも痛感しています。これまで、往々にして、私の価値観で相手をはかたり判断したり、時に裁いたりしていたからです。価値観の明確化の学びを通して、今、私は何か変えられていくような気がしています。(N. A.)

## ONE DAY

### 一日研修会 感想

#### ★南九州ブロック

マニュアル等に添うのではなく、自らが気付いて理解しスピリチュアルニーズに応える事が大切だと思いました。キッペス神父様の言葉一つ一つが意味深いのでまだまだ入り口です。(M.T)

\*\*\*\*\*

私自身の本当に求めているもの、その分析による新たな気付き、そして皆さんのお話から色々学べたと思う。もう少しシェアしあえるグループセ



鹿児島 2011年2月19日

セッションみたいなのは出来ないのでしょうか？(H.K)

\*\*\*\*\*

Ns として人間のニーズについて学んだこと

はあったのですが、スピリチュアルなニーズはほとんど学んでいなかった。自分のニーズは何か、それはどこからきているのか知ることができ、自分の心が開放された気になった。(Y.K)

## 第14回臨床パストラル教育研究センター 全国大会開催のお知らせ

日 程：2011年6月18日(土)～19日(日)  
会 場：日本教育会館(〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2)  
大会テーマ：臨床におけるスピリチュアルケア ～生きる力、活かす力～

3月11日の東日本大地震のため、被災されました方に心よりお見舞いを申し上げます。

**津**波による被害や福島原子力発電所のトラブル、それに伴う計画停電などのため、医学界など多くの学会で中止や延期が決定されています。しかし、第14回全国大会実行委員会では、このような時にこそ、スピリチュアルケアの存在意義が問われており、自粛ではなくより積極的な活動が求められているのではないかと話し合われました。全国大会は予定通り6月18-19日に開催することを決定しました。幸い今回は「臨床におけるスピリチュアルケア；生きる力・活かす力」をテーマとしており、この時期に適したものであると思います。特別講演の演者の一人、上田紀行さんは、新聞やテレビなどでも今回の震災について積極的に発言されています。委員会ではこの大会を、「生きる力・活かす力」について、真剣に考えられる場にしたいと考え、新しく自由討論の場も準備しています。

お誘い合わせの上、一人でも多くの方に参加していただけますようお願い申し上げます。  
(参加のお問い合わせは本部事務所まで)

全国大会実行委員会委員長 加藤眞三

### ～ 編集後記 ～

この度の東日本大地震で被災された方々に心からのお見舞いを申し上げます。新聞やテレビでこの災害からの復興に勇気をもって立ち向かっておられる方々の姿を見るにつけ感謝と敬意を覚えます。既に一か月以上も経た今でも毎日のように強い余震があり、東京ですらその怖さを感じるので、まして被災地の方々のお気持ちは如何ばかりかと察するに余りあるものがあります。更なる被害が無いようにと祈る毎日です。

今号の記事は、キッペス先生の巻頭文や特別寄稿頂いた井上ウィマラ先生の文を始めとして、3月11日以降に書かれたものはこの大地震について直接触れたり、あるいはそれを動機として書かれているものがほとんどです。スピリチュアルケアに携わったり、それを学んだりしている私たちとしては、こういう困難な時にこそスピリチュアルケアの真価が問われているのだと思わざるを得ません。日本におけるスピリチュアルケアの普及・啓発に向けて皆で心を合わせてなお一層の努力をしようではありませんか！

本誌への寄稿やご意見をお待ちしています。皆様のご意見こそ本誌をより良いものに育てるエネルギー源です。よろしくようお願い申し上げます。

お便りは、本部事務所か [yoshidat8@pastoralcare.jp](mailto:yoshidat8@pastoralcare.jp) 吉田まで

本誌「スピリチュアルケア」の発行費用の一部は  
中外製薬株式会社からのご寄付によるものです。